



みずふね ろくしゅう
水船 六洲

1912（明治 45）年生

1980（昭和 55）年没

描いた動物は……さかな！



【KURE ZOO 出展作品】

《魚の窓》1966年

《魚室》1967年

【参考文献】

- ・「美をきく：水船六洲氏」、
『産経新聞』、1972年5月19日付
- ・「ひろしまが生んだ美術作家たち：水船六洲」、
『美術ひろしま'97』、1997年
- ・オリヴァー・スタットラー
「MIZUFUNEの藝術」、『版画芸術』、1974年

1. 水船六洲ってどんなひと？

水船六洲は呉市草里町（現在の東中央2丁目）に生まれました。「六洲」は本名で、本当は「むつくに」と読みます。父は書家で、兄の三洋（さんよう）はのちに洋画家になりました。

水船は1930年に東京美術学校彫刻科に入学しますが、その理由として同校の西洋画科を卒業した兄のあとに続くのは嫌だったから、そして中学生の頃、高村光太郎訳『ロダンの言葉』を読みとても感動したからだと語っています。卒業後は中学校の教員として勤めながら、日展に彫刻作品を発表し、数々の賞を受賞しました。

3. 重厚な画面をつくる独特の技法

水船は版画にも彫刻のような力強さを求めて、独自の技法で制作を行っていました。版画を摺るとき、まず最初に紙全体を真っ黒にしてしまうのです。色ごとに版を分けて次々重ねていく版画では、このようなやり方は大変珍しいものです。そして下地の黒に負けないように次の色を何度も摺り重ねるので、六洲の木版画はとても厚みがあります。画像だけでは伝わらない迫力を、ぜひ展示室で体感してください。

2. 木版画との出会い

美術学校では彫刻科に進んだ水船ですが、中学生の頃から版画にも興味を持っていました。ムンクの版画集に触発され、傘の骨を尖らせて版画制作を試みたそうです。その後本格的に木版画の制作を始め、卒業後は版画協会に参加するなど、彫刻と並行して木版画も作り続けました。水船の版画は特に海外で評価が高く、1961年にはアメリカのマールボロ大学に招かれ、1年間版画の制作に専念する機会を得ました。彫刻と版画、両方の技術を身につけたことが、水船独特の彩色や線描に活かされています。

4. 水船六洲と動物モチーフ

彫刻・版画を問わず、水船は1960年代以降、魚や鳥といった動物をくりかえしモチーフに選びました。それには呉という海のある町に生まれたことも影響していたのでしょう。「海鳥の細くかん高い鳴き声と、海辺を走るいそぎと、潮に洗われるさまざまな形の海の生き物」に親しんで育った水船が、それらを作品として表現することはごく自然なことであったといえるかもしれません。